住宅総合研究財団
研究年報 No. 17 1990

論文3

# 風土の特性を生かした計画の手法
## ——住居・集落の居住様式をめぐって——

畑　聰一（芝浦工業大学助教授）

### はじめに

オイルショックの後，住宅の質の問題がクローズアップされてからは，都市における家庭や家族の器としての住宅は堰を切ったように複雑さを増し，多様な展開を示すようになってきた。昨今は，その中身がどうであろうと，標準的，平均的でない構成を強く志向し，ひとと違っていることそのものに価値を見いだすような風潮さえ感じられるのである。こうしたわが国の状況の到来には，それなりの背景がある。

しかし，このようなわが国の都市域にみる爛熟（らんじゅく）の様相は，その視点を少しずらすことによって，つかみどころなく特化した奇形の住宅群に見えてくる。確かに，産業化や工業化がもたらした一種の統一的な風景は感じられるのだが，そこに家庭や家族の器としての表現が見当らないのである。ましてや，その統一的なるもののなかに近隣やまちを特徴づける一片の表情さえも浮かび出させていない。

だから都市空間では，自らの居住の仕組みについて考え，その結果を反映させる基盤が失われてしまったかのように感じられる。伝統的な集落や都市では，環境の仕組みをかたちづくるメカニズムは無意識のうちにも働いていたが，いまやこれを意識的に組み立てることも，都市住居として具現させることも困難なのである。都市の住宅は，仮に産業が用意したメニューのなかから選択したものであったとしても，住み手の意識のなかでは，それぞれに住まいへの夢を個別に描いた結果として映る。つまり，環境づくりの理念は限りないメニュー作りとともに埋没する運命にあり，その一方で都市家族はそれぞれに描いた夢で都市を覆い尽くすのである。いまや人びとは個や家族のエゴを肥大化させ，巷の情報はこれを個性に見立てて礼讃（らいさん）する。そのような理屈によってつくられる都市の住宅には，もはや共存への夢を託すことはできない。これが，地球環境の危機が叫ばれている只なかの，わが国に固有な都市住宅の状況である。

一方，地球環境をめぐる人工環境の問題は極めて多様であり，しかも地域的である。それぞれに直接的な解決を迫られている。近代化の進展した技術立国の場合，その問題の本質は，これまで性能一辺倒に終始することで遙（はる）かに忘却してしまった，自然環境との共生を呼び戻せるや否やにある。近代化の波は，伝統的な生活様式を快適性や利便性などのスローガンのもとに解体させ，外化させつつ進行した。しかもその住宅や生活から様式としての地域性や民族性を剝奪し，透明で均質なものへと向かわせてきた。近代化の風が吹くと，どこでもこれを歓迎し，それまでのエコシステムに寄り添うように生きる町や村の営みを因習の産物のように廃棄して新しいものへと飛びついてきたのである。

未開社会の住居や伝統的な住まいは，長い年月をかけ，地場の材料を使って地域に適合した空間の形式をつくり出し，快適な室内気候を生み出した。むろんそれにふさわしい工法をあみだした結果である。しかし，そのような技術やメカニズムから遠く離れてしまった今となっては，われわれの技術体系をそれに近づける訳にもいかない。一方で，それらの伝統技術は集落や地域が共存するシステムのなかにしっかりと根を下ろし，組み込まれていた。つまり，住居や集落のつくり方は，人びとが共存するためのルールのなかに反映されてきたのであり，具体的な技術の復元にこだわるよりもそうした無形のストックの方が，地域の再生には役立ちうるのである。しかも，古い伝統技術が近代化に瀕（ひん）していても，環境との対話の事例やそのなかの共存のルールはまだかろうじて生きている。そのような事例を報告することによって，地球環境の新しい住まいの地平が見えてくるように思う。

小論では，このような状況と視点を踏まえ，地域の住居，集落のなかに，人びとが自然と共生しつつ共存しうる計画の枠組みや手法を探ることにしたい。しかも，ここではそれらが人口集中を続ける都市と同じ地球環境に共存する側面を重視し，現代の都市住居の状況にひき寄せて取り挙げることにしたい。

### 1．対立する共存社会への思い

住居や集落の環境に対する在り方を問う前に，人間自身が地球に住む同じ種として共存しうるか否かが問われてしかるべきである。地球環境を維持する方法のなかに，

互いに背を向けあって個別に対応するやり方はない。放置すれば確実に死滅する趨勢のなかで，その地球は50億を超える人口を擁しているのである。

### 1－1．マクロな視点――アメリカ型とヨーロッパ型

地球に共存するイメージは，昨今大きく２つに分かれているように思われる。ひとつは地球を人類が居住する共有財産とみなして，新しい全体としての秩序をそこに見いだそうとするものであり，いまひとつは国家や民族や地域を地球居住の単位とみなして，それぞれが居住にかかわる責任を負い，その集合体としてのバランスのなかで全体の調和を図ろうと試みるものである。

前者の場合は，地球環境をひとつの運命共同体とみなし，常に全体を強く意識しながら分業しつつ，共存を図ろうとする。こうした見解は，アメリカ合衆国を典型として新大陸で好んで発想される考え方である。アメリカ合衆国では，およそ全世界の民族が移民してそれぞれに居留地を形成し，これらがあたかもモザイクをなして国家を形成する。そこでは，国家というひとつの統一体をつくりあげる悲願が，祖国や民族を超えることによってのみ形成されるのである。その建国の歴史は，国民がそれぞれに民族への郷愁を断ち切り，回帰願望を否定し続けた逆流の歴史である。だから，現実がどうであろうと，人類の地平として限りなくコスモポリタンを標榜（ひょうぼう）し，それゆえに言語や民族に回帰する社会構造は認め難いのである。人類共存への夢は，ひたすら宇宙ステーションに結実すると言ってもよい。

一方，後者は根強い伝統社会を背景にして，その上に築かれた民族色の濃い国家の場合を典型とする。そして，その国家を自律した居住環境の単位と考え，その集合によって地球環境という全体を構築しようというものである。ヨーロッパ諸国にはいち早く産業革命が到来したが，家族や社会はすでに18世紀の中頃（ごろ）には近代への道程を歩み始めていた。今だに根強い伝統社会のテクストを存続させるヨーロッパでは，地域的，年代的にゆっくりと進行する近代化とともに，それによって失われつつある自然環境や疎外されつつあった伝統的環境を復元させることに細心の注意を払ってきたのである。

そこには，長い歴史を通じてその固有の環境を知り尽くした民族が，それぞれの責任において身近な地球環境を保全するという地域の論理が，議論の余地なく存在しているのである。だから，言語や民族の織りなす文化的なまとまりが，細かくひだをなす自然地形とセットになって無数に存在し，それらが互いに認めあう構図になっている。しかも，それらの居住地には移動がない。どの地域の生活や空間をみても，十分に個性的であり，固有に伝統居住のテクストを存続させている。

ここでは２つの共存の理念に対し，前者をアメリカ型，後者をヨーロッパ型と呼ぶことにする。共存への思惑は，昨今の日，米，欧の間で繰り広げられている政治的，経済的な対立の背後に見えてくる。

むろん，アメリカ型とヨーロッパ型の事例のみによって，共存への思いが語り尽くせる訳ではない。日本の位置を考えるなら，少なくとも東アジアや東南アジアの事例を射程に入れて思い描く必要があろう。揺れ動く社会主義諸国やイスラムやアフリカの描く世界もある。それぞれに別の対立がありそうである。そして，ジャパンマネーが招いた国際都市，東京の多民族居住への実験は，地球環境の問題も吹き飛びそうなくらいに，共存の難しさをわれわれに見せつけている。その交錯する都市居住の現場は，昨今の地球環境の問題さえも，結局は異なる文化や民族に育った人びとと共存できるか否かに帰結することを教えている。

### 1－2．ミクロな視点――共存を拒絶する都市の居住観

ひとは住居をつくってそこに家族を育み，集落や町をつくって社会生活を営んできた。家族や社会の定義には厳密を要するようであるが，大雑把に言えば人びとは有史以前からこうして共存してきたのである。例えば，近代社会とまったく異質なプリミティブな社会においてさえ，われわれの観念では思いもつかないような精緻で複雑な親族や社会の体系の存在することが報告されている。一方，砂漠の淵のベドウィンやモンゴルのゲルなどの移動式住居であっても，移動地は１年を遊牧のリズムとして集団や社会のバランスのなかで決められており，思いのままに移動することはできなかった。また，封建制度の敷かれた前近代社会においても，村や町は人びとが共存するための共同体として形成され，家はその要素をなしていたのである。当然のことながら，それらの居住様式には共通点が認められた。常に，住居は集落の要素として存在し，しかも住居やその集合のなかに集落を特徴づける仕組みが存在したのである。

従って，人びとは家族という親族を中心とする単位を構成要素にして複雑で独特な社会を築き，固有の環境を造形してきたと考えてよいだろう。言い換えれば，家族やそれを収容する住宅の有り様は，地域社会や地域環境を特徴づける重要な要因のひとつであり続けたと考えて差し支えない。それは，豊かな家族生活を実現させるために，あえて家族という単位を乗り越え，集落や運命共同体を構築したと認識できるものである。

一方，そのような家族を収容する住宅は常に世代継承の場となった。共存社会は「存続」させることを象徴機能として成り立つが，そのためには集落の構成要素である住居単位の存続を前提にしなければならなかったからである。つまり，住居が世代継承の場となって家や集落の存続を支えたのである。

後に例示する伊勢湾の島々は，その島嶼性のゆえに，イエが互いに強く結びついて共存社会を形成する。ここでは，通過儀礼が昭和40年頃まで世代継承の場として特別な意味をもって昔ながらに演じられていた。なかでも葬式は人生最大の行事と言われ，葬列の役割の一人一人が死者との系譜や関係をひもとくかのように島のテクストに沿って正確に演じられていた。こうして集落の全戸が参加して行われる葬列は，まさしく世代継承（代替わり）を認知するための絵巻物となったのである。

また，島の結婚にいたる過程も随分と丁寧であった。結婚の申し込みから結納，成婚にいたるまで，弓張り提灯を従えた使いの人が両家の間を幾度となく往復するのである。その道は本通り（本ミチ）と称して，集落の誰(だれ)もが知っており，しかも使いは夕刻に大きな声を出し衆人の関心を集めながら通ったのである。これも集落の変化を認知する行事であったが，イエ相互の結びつきという恣意的な変化を集落に広く認知してもらうためには，半年，１年という長い歳月を要したのである。だから，この婚約期の長い手続きはイエとイエの結びつきとともに，次代の集落を担う世代を認知する行事でもあった。

これに対して，現代の都市の住環境はどうだろう。残念ながら集落の側に依拠してみると，その人工環境には共存を拒絶する病理がある。

急速に核家族が増え始めるのは，30年ほど前，高度経済成長期を迎えたかつての都市の住宅からである。都市へと移動して成長期を支えた家族の多くは核家族であったし，当時の成長する企業が要求する転勤に耐える家族もまた，若い身軽な核家族であった。少し遡るなら，戦後の住宅理論や建築家の提案する住宅もまた，動線やゾーニングなどの新しい理論で計画，設計された合理的な小住宅であり，核家族を対象としたものが多かった。当時の状況のなかでは，イエや世代継承にまつわる空間の要素や生活様式の持続が，誰の目にも封建的なものと映ったのであり，このような認識もまた無意識のうちに核家族化を促した筈(はず)である。

この核家族はモーレツ社員の主人と教育ママの主婦，それにテストに追われる子供たちによって形成され，その希望に燃えた「わが家」では，主人のいない団らんや部屋に籠(こ)もる子供の生活をあたりまえのように受け止めていた。持家や車が普及すると娘たちが嫁ぐイエの新しいイメージもできあがる。「家つき・カーつき・ババ抜き」が都市居住の現実になりつつあったのである。

このような核家族には，80年代の，共存を拒絶する病理の初期症状があった。もはや，都市の住宅には世代継承の場が見えなくなっていたのである。子供にとっては，祖父母との交渉がすでに日常的生活から遠ざかり，楽しい夏休みの行楽先であったり，小遣いをくれる親切な肉親以外の何ものでもなくなっていた。成長期の家族は，自分たちの置かれた親子関係の局面を，常に初めて体験する新しい状況として受け止めざるを得なかった。しかも上の世代や近隣とのあいだに一線を画し，それを自分たちの問題として自閉ぎみに対処してきたのである。もうひとつは子供部屋の出現である。寝室を犠牲にしてまで勉強部屋を確保した夫婦の気持ちは，なかなか子供には伝わらない。もちろん，初めて出現する子供部屋には，住み方やしつらえのテクストなど存在しないから，親の方でも子供にどのように与えたらよいのか，まったく分からない。結局，この住み方のテクストらしきものは，やがて子供たち自身が仲間を介して自然に生みだしてゆくのである。

こうして，集落での居住観に依拠して，都市の住居やその居住観を展望すると，集落から都市へ，また周辺から中心へと到るにつれ共存社会が家族単位へと分解し，個別化しつつある空間分布の傾向を捉(とら)えることができる。しかも，そこに戦後史という時間的な要素を加味すると，それらの居住観は明らかに「自閉」に向かって動いてきた。

これらの居住観は共存から個へと向かう軸の，幾つかの段階によって捉えることができる。それらは，住宅を現場にして生起される居住テクストの枠組みを示しており，それぞれが，自ら与えられた環境に適応し生存するために築きあげた心理的，社会的な住宅の諸表現に内在

**表―１　家族の類型と居住観**

| 居住観 | 共存性 | 世代性 | エロス性 | アリス性 |
|---|---|---|---|---|
| 構成 | nF（複数家族）<br>F：家族 | nC（世代家族）<br>C：夫婦単位―核 | \|C\| mf（夫婦）<br>\| \|：壁　mf：子供 | \|P\|（個人／エゴ）<br>P：個人 |
| 家族の理念 | 家族連合 | 世代同居家族 | 夫婦家族―核家族 | １人家族 |
| 象徴的機能 | 社会の存続 | イエの継承 | 愛情の持続 | 夢のトートロジー |
| 負機能 | 共同体幻想 | 世代の断絶 | 愛憎と嫉妬 | 心身の自閉 |
| 世界 | 連合、連帯世界<br>共同社会の理念として描かれる世界 | 世代 共存の世界<br>世代同居などによって達成される世界 | 性愛世界<br>夫婦のエロスによって形成される世界 | 空想世界<br>孤独な個人によって到達しうる想像世界 |

するものである。集落の居住観は共存性や世代性を志向し，都市の居住観はエロス性やアリス性を標榜する。

この4つの居住観は，極めて特徴的な家族の理念にそれぞれ写し換えられる。共存性は共同社会の理念として形成される家族連合に，世代性は家の繁栄，存続をめざして上下世代が繋がる世代同居家族に，エロス性は壁で固めてエロスの世界を描くことを可能にする夫婦家族もしくは核家族に，そしてアリス性は隔離された空間のなかにあって鏡の向こう側の想像世界へと埋没可能な1人家族にである。その水準は共存から自立へ，伝統から近代へ，そして社会性から個別性へ，さらに外界から内面へと向かう段階をも示している。

## 2．世代継承を拒絶し自閉する住まい

わが国の集落や町は地縁的な関係でなり立ち，同族社会を母体としていない。一方，隣の韓国や中国では根強く同族社会が存続している。韓国の場合など，何代もソウルに居住する家が出身地や一族の故郷である本貫にこだわりつつ生活する姿は決してめずらしくない。そして，韓国でも首都圏への人口集中が大きな問題となっており，その比率は全人口の1/2ともいわれているが，このような同族社会を前提にしてのことである。だから，正月や盆には日本をはるかにしのぐ民族の大移動が発生する。しかし，都市居住をしている多くの人たちにとっては，出身地は代を重ねても変わらぬ故郷であり，いつでもUターンすることが可能なふるさとなのである。

ヨーロッパ社会もその背景には根強い同族組織（クラン）が存在する。ギリシアの場合など，韓国と似た状況がある。政治も経済も社会もアテネを起点にした一極集中型の構造を呈するのである。アテネを起点にしたギリシアの船や車や航空機の物流ルートが，その集中の度合を如実に示している。従って，たまに隣の島や都市へ出かけるのに，アテネを経由せざるをえないのだが，この不都合を回避する要求は無視できるほど少ないのである。リゾート地の住民のなかにはアテネにも住居を構える者が多く，夏のシーズンと冬とで住み分ける者が多い。アテネは子弟の教育を行う場所と考えられており，しかも，のんびりと過ごす冬季には都市施設を享受できる利点がある。ここでも，春のイースターにはアテネから地方への民族の大移動が発生する。そして，クランは一門の家族であれば，いつでも受け入れてくれる地域の温かい集団として機能しているのである。

同族社会では，海外移住のパターンにも特徴がある。ギリシア，ミコノスの場合，シカゴ近郊のジョリエット市に200世帯が住んでリトル・ミコノスを形成する。このような場合，ミコノスの20前後の主要なクランは結束してひとつにまとまって行動する。そして，ミコノスのような行動，集団のつくり方は，地球環境の大半を占める同族的な社会に共通していることのように思われるのである。

このような社会に住む人たちからみると，わが国の都市の核家族が形成するマイホームでの生活はよほど奇異に映るものであるらしい。わが国では同族へと意識は向かわず，家が唯一世代継承の場であった。その家を戦後家族は放逐したが，新しく模索してつくり出したマイホームには世代性を存続させようとする意図はない。住宅はかろうじて次代の世代をもうけ，育てる場とはなったが，かつてのように世代が寄り集まって無意識のなかにも世代継承の現場とする機能はなくなった。都市の家族が無意識のうちにつくりあげた，子供部屋の与え方やその後に招来する親子の関係についても，彼らの世界からみると，表面だけがベタベタして中身の薄い，乾いた関係に映るのである。

### 2－1．世代継承の場としての住居

わが国の住居には，戦前まで「家」という観念が生き続けていた。戦後，憲法が改正されても，簡単に「家」がなくなった訳ではない。都市の住宅建設を復興するのに，10年前後は必要としたし，復興へと本格的に動き出しても急に家や住まいに対する観念が変化したのではない。「家」に生きる住居と新しい住居の混在は，戦後45年を経た今日でも指摘可能である。

この家が生きる姿は地域の集落などで今もみることができる。もちろん，戦前の形態そのままに存続させる地域はないが，時代に擦りあわせながら当時の家に対する観念を継承しつつ今に伝える集落は少なくない。「家」は継承されることが前提だから，そこには世代継承の場が隠されているのである。従って，ここでは過去に行った調査事例を中心に，世代継承の場としての特異な形態と生活様式とを持続させる住居の幾つかについて例示し，その仕組みについて論じたい。

**(1) 一般同居型**——直系家族と複合家族の例

日本の場合，かつての「家」の多くは，直系家族を母体にしたものだった。離島の集落では，今日，過疎が進み，若い世代は島の外へ働きに出るケースが多くなったが，「家」の構えそのものは，過去の形式をそのまま踏襲したものが多くを占める。それでも，伊勢湾離島の答志集落では，3世代の直系で居住する家が6割を超え，傍系を含む複合家族に類する家も数パーセントに達する。答志では，次男が分家して新たに核家族を構えるケースはあるが，長男が親の家から出て世帯を構えることはない。長男は親と同居して共に暮らすのがテクストになっているのであり，昨今でも，直系の4世代が共に暮らす事例はめずらしくない。

飛騨，白川郷の合掌造の家は一般によく知られるとこ

ろである。その傍系が大家族をなして居住していた民家では，他家の相続人（家長）に嫁ぐ女子以外の男女は，生涯その生家に留まることが原則であった。次男以下の男は分家することも許されず，夜だけ妻のもとに通う妻問いを続け，一方他家へ嫁げない女のもとへは男が通い続けていたのである。妻問婚で生まれた子供はすべて妻の家に帰属し，将来の貴重な労働力として期待された。このような特異な仕組みをもつ家族の断面は，多くの傍系親族を含む，極めて複雑なものであった。川崎市の日本民家園には，こうして28名の家族員を擁して住まわれた大屋根の民家が展示されている。

これらは1つの住居で住み分ける，一般的な世代同居の形態である。前者は一般にみられる同居の形態であるが，伊勢湾離島のように規模の小さな住居が高密度に集合する集落では，世代同居の形態が極めて固有に展開した。

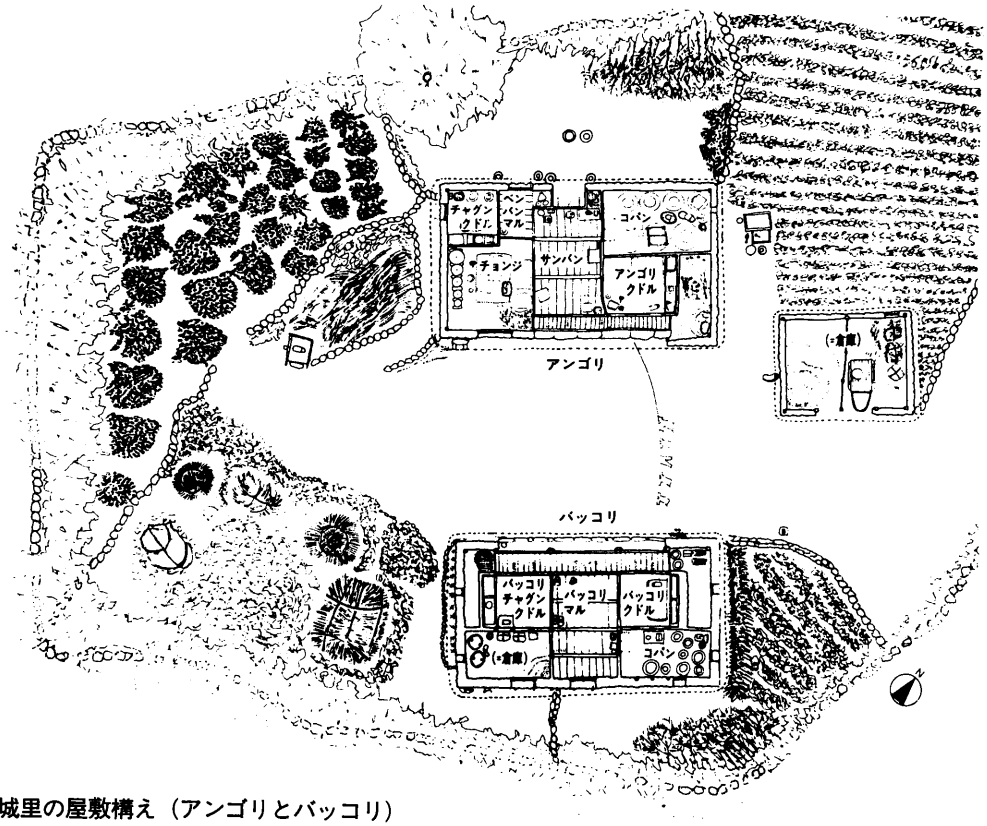
間口を2間，広くても2間半，間取りをウナギの寝床のように2，3室直列させた住居が，通りを挟んで短冊状に並ぶ坂手集落の今日の平面は，江戸末期の文政時代とあまり変わらないものである。明治に入って世帯人数が急増し，世代同居が困難になると，これを打開するためにツシ2階の屋根を居住可能な高さに持ち上げ，これを隠居部屋に転用した。こうして坂手では，明治末期にすでに2階に隠居部屋を建設し，世代同居を階分離によって達成する住宅が普及していたのである。

一方，狭隘な住宅のなかでは，若夫婦と青年期に達した息子たちの同居を実現することが困難だった。伊勢湾離島では，昭和初期まで寝屋制度が隆盛を極めた。これは，青年期に達すると仲間とともに世話をひき受けてくれる寝屋親の1室を借りて寝室とし，結婚するまで同居する制度であるが，寝屋仲間や寝屋親との関係は強く，集落の社会構造を規定する強固なものであった。寝屋は社会教育や漁業技術の習得の場でもあったが，世代同居の達成に寄与した点は重要である。過疎とあまり関係のない答志集落では，その寝屋が形を変え，青年団活動の一環として今も存続しているのである。

白川村の事例は日本でも特異なものと言われている。大家族制度は集落の戸数を変えないという前提で成り立つが，その戸数は，一方で集落が所有する山林や農地の生産力によって限定され，他方で養蚕の人手確保がもくろまれていた。白川村の場合，このような複雑な大家族を幾つかの単純な家族に分解することが直ちに人口と生産力とのアンバランスを招来させるのではなかった。むしろ山村で生き抜くためのテクストもしくは歯止めとして，戸数を限定し妻問婚を強行する居住様式が展開したのであろう。

**(2) 隠居分家型**——済州島のバッコリ

韓国，済州島には特異な隠居分家制が存在した。同一敷地に2つの類似した平面をもつ居住棟が中庭を挟んで向き合って配置されるが，やや規模の大きな主棟をアンゴリ，もうひとつの副棟をバッコリと称して区別した。長男は嫁をもらうとバッコリで生活をはじめる。やがてアンゴリで両親とともに生活していた弟が分家し，妹が嫁いで長男世帯とのあいだに人数の逆転が生ずると，親




**図―1　済州島鳳城里の屋敷構え（アンゴリとバッコリ）**

は今まで住んでいたアンゴリを長男夫婦に譲り，バッコリに移り住むのである。済州島では，親と長男が家族の規模を考慮しながら，実情に合わせて住居を交換しあい，住みこなしているのであるが，そこには竈も便所も農地も分けて生計を完全に分離する原則が存在した。両親はバッコリに移動しても長男夫婦の世話にはならず，動けなくなるまで働いたのである。

済州島では，直系家族が2核に分解されるので，世代性が排除されているかのようにみえる。しかし，韓国は済州島を含め，中国や台湾と同様に強固な同族社会を形成する。そのようないわば安定した社会のなかで，しかも決して豊かとは言えない土地で農業を行うには，生産や生活の単位を最小限に抑えて経営努力をする必要があったと思われる。済州島の特異な分棟の空間は，類似の住居が同一敷地内に，しかも向き合ってあたかも統合を意図するかのように形成される点にあるが，そこでの居住様式は，最小世帯に分割するという，まさに統合と逆の意味が付与されることで確実に世代が継承されてゆくのである。

**(3) 隠居別居型**——対馬の余間

対馬の古い集落は，本戸と称して入会権などの一戸前の権利を有する家と，寄留と称して村の権利を持たない分家や外から入植した家の2種によって構成されている。そして，集落に代々居住し，本家に相当する本戸のみが隠居部屋である「余間」を所有する。昭和30年頃までの余間は，一般の「離れ」に相当するしつらえに近いものであった。台所を含む多用途の居間（和室）と襖で繋がる寝室（和室）の2室が余間のすべてであり，便所は設けられていなかった。

この余間は高度経済成長期の頃から変化しはじめ，2室から3室構成へと拡大する。その内容は，以前の居間を調理，食事の空間と団らん，接客の空間に分解するものであった。そして，オイルショックを経て低成長期に入ると，2階建の余間が出現する。余間の位置は，屋敷に余裕がなくなったこともあって屋敷から離れる事例が多くなる。しかもこの時期になると余間に便所や浴室が付属する。大きなものは都市の小住宅ほどの規模をもち，余間らしく見えないものも出現する。上下それぞれ2室，全室に畳が敷かれている。その日常的な生活は，かつての余間と変わらないものであるが，2階に成長した孫の部屋や客室などが新たに確保されている。

対馬の余間は，2つの特徴をもっている。当初の余間はオモテ（本棟）と同じ敷地に建てられることが多く，その空間だけをみると普通の隠居家のようにみえる。事実，余間のオモテとの関係は昨今のそれよりも強かったと思われるが，便所が外に設けられていた当時としては，余間での生活は必ずしもオモテに従属するものではなかった。鰐浦の場合，長男が結婚するとオモテでの生活の権限を次代に譲り，上の世代はあたかもその証であるかのように隠居したのである。この主要世代の代替わりやその後の世代間の生活上のやりとりを可視的にする仕組みは，鰐浦が村内婚を続けてきたことと関係があるように思われる。狭い血縁社会のなかで，母—娘の関係と嫁—姑の関係を最も抵抗なく成立させる仕組みとして余間が機能していることは論を待たないであろう。

余間のもう1つの特徴は，それの現代への展開にある。余間は時代の要請に柔軟に対応して，隠居部屋から確実に住宅へと変貌を遂げている。しかし，あくまでもオモテが本戸を代表する家であり，余間がこれに代わることはできない。通過儀礼や祭礼などの行事は，余間に住む上の世代もオモテに来て行っている。むろん，仏壇や盆棚はオモテにしか設けない。しかも，今日のオモテと余間の使い方には極めて現実的な対応がみられるのである。余間に住む世代に収入があれば，オモテの収入に加えて配分し，客室の使用についてもその決定に際しては，来客の属性を考慮していずれかを選択する。さらに，子供部屋についても，実情にあわせていずれかを選択する余裕がみられるのである。余間の近年の展開は，このように上下の世代をともに自律させていると言ってよい。

**(4) 核家族型**——ミコノスの事例

エーゲ海，ミコノスは父系血縁にもとづく同族社会である。ミコノスに限らず，この地の婚姻には，花嫁の父親が花婿に対して住宅と多額の金品を持参させる，プリカという独特の習慣がある。花嫁の父親は，プリカとする住居を持たなければ，息子たちの労働力を借りて住宅を新たにつくらない限り，大手を振って娘を嫁に出すことはできない。相手の資力に応じ，それ相応のものが要求される。仮に，双方の家族が身ひとつでと合意したとしても，クランや集落の目を説得することはできない。そして，一般にそれを査定するのはクラン（同族社会）の勢力を嵩にきた花婿の父親である。

内陸部の散居する村では，人手の必要な有畜農業をなりわいにしているため，核家族は少ない。このような農村部では，家族は世代ごとに部屋を構えて居住する。夫婦はひとつのベッドで一方が欠損するまで就寝し，他方では結婚前の兄弟は男女であっても，年齢に関係なく同じ部屋にベッドを構える。

しかし，集落の生活単位は核家族である。プリカされる住宅は集落に集中するので，その内部に住宅が不足するということはない。集落では，家族や一族が結婚する度に，住宅の所有権が移動するので，勢力のあるクランを中心に血縁関係が網目状に張りめぐらされ，住宅の所有や利用の関係もまた複雑，多岐に及ぶこととなる。ミコノスでも老親の世話をすることは当り前となっているが，住まいについては1人になっても同居しない場合が多い。それは，親がもつ固有の交遊関係を自然に存続さ

せるためであり，またそれを可能にする空間的な条件が整っているからである。嫁は老親の世話をするために，共有のドロモを日に何回となく往復するのである。

**(5) 母系家族の分棟型**——中国，ラマ教徒の事例

中国の民話や説話には，奇異な結婚の制度や母系家族に関するものが少なくない。おそらく，社会を存続させ，家系を絶やさないためのさまざまな婚姻の制度が存在したからであろう。

チベットのラマ教（仏教）を信ずる少数民族のなかには，家計と相続の両面で母系制をとる事例が報告されている。なかでも，四川省との境界に近い雲南省北部の少数民族で，ラマ教徒のモソ族は，特異な母系にもとづく住居空間を形成している。そこでは母系に拠ってさまざまな世代が大家族をなして居住するが，男女ともに生まれた家で一生を過ごすことで家族が成立する。つまり，家族（正確には血縁関係者のみの集団）のなかには夫にしたり妻にする異性が存在せず，系譜の一方を担う男性は常に外から通い，妻問いのかたちをとるのである。

その空間構成は，来訪者との交渉をもつための若い女性の家屋と，エロスの欠落した家族の棟が庭を挟んで対向する。そして，もう一方の軸にもラマ教の祠と家畜舎を兼ねた校倉の倉庫とが配置されて，四周を家屋で囲む閉鎖的な中庭が形成されていた。エロスの欠落する家屋には，他家に妻を持つ男性，その年代を通り過ぎた老人男女，世代継承の予備軍としての子供たちの生活拠点となったのである。また，その集落には幾つかの民族が混在していた。従って，このような特殊な家族の構成は，一族を複雑な集落のなかで存続させるべく機能した面も強い。これを集落の仕組みという点からみると，住宅は男女の関係によって，まさしくその構成の図式通りにラチス状を呈する住居群（集落）のジョイントの役割を果たしてきたのである。

**(6) 世代継承の場としての住居**

こうして，住居は常に世代継承の場になってきた。しかも，集落が違えば，その形態もまた異なるのが普通である。集落は常に家族の器としての住宅を構成要素として成立する。だから，住居に形象される世代継承の場は，集落を単位とするバランス・シートのなかでも調整されるのである。しかも，集落がアイデンティティを持とうとすれば，それぞれの住居が集落の要素となるような共通する側面を強化することになる。

先に示した世代継承の事例は，それぞれ固有の特徴をもっている。そこには，単に日常における世代間の生活のし易さだけがあったのではない。常に，家の存続と集落維持の機能が働いていた。無意識のうちにも，家や集落の存続を願って分家や隠居家が形成され，またそれをテクストにすることによって集落が固有に展開したのである。だから，集落のなかで世代が分居する形態は，あくまでも固有のテクストに沿って形成されているとみるべきであり，昨今の都市住居で散見されるような思いつきによって生まれるのでは決してない。このように捉える世代居住の形態とは，集落や住居の形質それ自体をも規定するインフラ・ストラクチャーと言うべきかもしれない。

### 2—2．戦後家族の居住観

集落は自らを成り立たせるために，自律機能を必要としたが，それは周辺環境になじみ，適合するための総体をつくることでもあった。その総体には，自律する社会の縮図としての集落だけでなく，新旧が共存する歴史的な断面としての集落の側面もまた存在した。つまりそのなかには古い住居と建てたばかりの住居が同種のテクストによって形成され，共存した。それらのテクストに，もし違いがあるとすれば，建てられた時代の違いが招来させる変容の部分であった。

一方，先述のような集落や家が存続するために，住居は世代継承の場となっていた。一般的に言うなら，住居は常に世代が縦に連なって居住する場所であった。そのような家族を一般型として中心に据えるならば，複合する大家族や母系家族の事例，分居する家族や核家族の事例はそれとの関係において把握することができる。そして，伝統社会の核家族はしばしば問題とされるが，その背後には同族社会や核家族化を促す生産形態などの特殊な仕組みが作用していたと考えてよい。

住居には概(おおむ)ね3世代，高齢者を抱える家では4世代が居住した。だから，住居はこれらの世代が干渉しあう場所となった。共に住むという原則のなかで，世代はそれぞれに役割を分担しあい，古い時代の風景を伝え，受け継いださまざまな技術を教え，そこに生ずる断絶さえも次代の肥やしにしてきたのである。それぞれが世代の価値観をぶつけ，年長の世代がこれを統合するかつての家の体裁は，個人とりわけ女性の生きかたを著しく圧迫したが，一方では，家を持続させるメカニズムそのものでもあった。

**(1) 育った家と住んでいる家のギャップ**

近代化が急速に進展するのは高度経済成長期である。しかし，その近代化を支えた世代の育った住宅には，まだ続き間やそこに中廊下を導入した伝統継承型の住宅が多かった。成長期の担い手たちは伝統へのこだわりを微塵もみせなかったが，その住意識の深層は伝統的な居住観念によって支配されていた筈である。

昭和15年頃から戦争を挟む10年の間は住宅の建設活動が停止していたので，彼らの育った住宅には戦前のものが多かった。さもなくば，戦後のバラックの範疇に含めてよいものだった。今で言う木造住宅の古い形式，しかも間仕切りに壁を用いず，襖や障子によって部屋を区

切った伝統的なものである。このような住宅の居住体験から言えば，個人や家族の生活は決して部屋単位では行われず，相互にはみ出し干渉しあっていた。隣の部屋は言うに及ばず，対角方向の部屋の気配までも伝わってきて，親や兄弟がどこで何をしているのか，おぼろげながら理解することができた。家族は互いにこのような生活を基盤にして理解しあってきたのである。そして夫婦の性の規範もまたそこにあった。

だから，日本家屋には，相互に干渉しあうことで自然に理解しあい，互いの気分や健康に気遣う機微を常に感じながらの充実する暮らしがあった。紛らわしいと思うときにも干渉せざるをえない構成こそが，日本家屋を育んだ家族の結束のスタイルであった。

つまり，当時はこのような伝統継承型の住宅に育った世代が，それとは全く異なる新しい合理的な壁の多い住宅で急遽，生活を始めざるをえない状況が存在したのである。子供の将来に夢を託し，夫婦の部屋を犠牲にしてまで勉強部屋を優遇するその世代の価値観には，子供に世代継承を期待する伝統的な家族像が反転して写し出されている。そこには，室生犀星の「うた」に託して故郷を棄て，世代性を子孫のみに期待して理屈ぬきにマイホームに憧れる病理性が存在したけれども……。寝室重視の提案もあったが，当時の世代にはこれを壁で固めて夫婦家族をめざし，エロスを志向するような居住観念はまだ育っていなかったのである。

このように考えてゆくと，住んでいる「世代」と住まわれている「住宅」との間にギャップが二重に交錯していることが分かる。長子結婚で刻んでゆく世代性，その家族発展のサイクルは概ね30年である。多くのひとは三通りの世代を経験する。一方，戦後の木造住宅の耐用を同じく30年とすれば，一生のうちに建築年代の異なる3つの住宅に居住することになる。

仮に，いま働き盛りの世代と彼らが居住している住宅の耐用年数，30年を基準にして，前後の世代を想定してみる。すると「住んでいる家」の1世代前には，父の建てた家，すなわち自分の「育った家」があった。そして，1世代後の子供が建てる家は自分が身を寄せて「暮らす家」に相当する。つまり，自らが関与して建てる家の前には，青少年期の居住体験を通して影響を強く受けた家があり，後には不安な余生を象徴するかのように，決して見ることのできない未来の家がある。そして，3世代が居住する住宅には，それぞれの世代の「育っている家」，「住んでいる家」，「暮らしている家」が重層し，そこでの生活は3者の異質な居住体験が交錯する現場となっている。こうして，住宅を更新する度に，世代が一コマずつずれて代替わりをしてゆくのである。

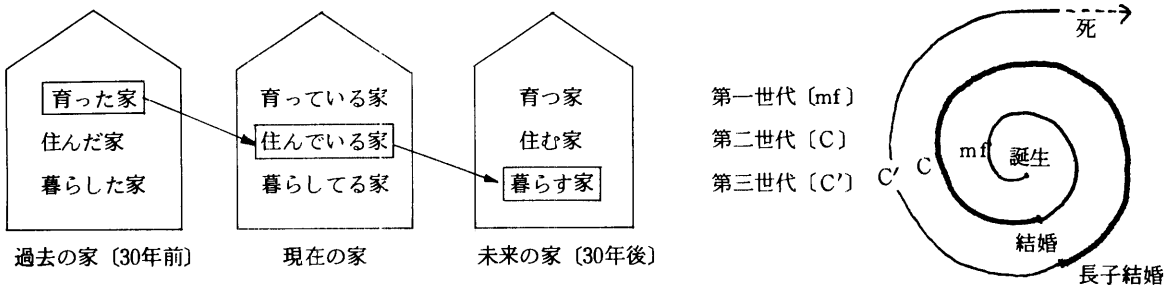
これは，あくまでもモデルである。現実にはなかなか図式どおりに展開しない。上の2世代がともに仕事に就いて「住んでいる家」であることを譲らなかったり，上の世代が「暮らしている家」であることを認めない状況ならばいたって健全である。問題は，世代の住居観や世代の建てる住宅にあまりにも大きな落差が生まれ，世代相互を分解する方向に動いていることにある。

**(2) エロスからアリスへ**

昨今は，熟成した子供室で育った世代が家庭をもつ時代である。彼らにとって，家庭はもはや世代継承の場として意識されていない。彼らを育んだかつての住宅さえも，すでにジジババ抜きの過渡的なものであって，彼らの側からみれば，もはや世代継承の場にはなり得てなかった。そのような新世代の家庭が目標とする家族理念は夫婦家族や核家族であるが，その居住観から先の共存性や世代性を欠落させている点に最大の特徴がある。友だち夫婦や2人家族と表現されるような気軽さとともに，愛情を関係に置き換える現実性が，家族を社会の要素と認識するべき社会性を大きく後退させているのである。

子供は時代の気運に乗じて親から勉強部屋をあてがわれ，やがて脱皮を繰り返してこれを個室へと昇華させてきた。そして，個室のなかで自我や性に目覚め，個室を拠点に発想し，そこを起点に行動し続けてきた。しかも，個室空間をとおして住宅を捉え，家族や都市や世界さえもみてきたのである。いまやその個室は，唯一自己表現の空間であり，陶酔可能な空想世界であり，逃避の拠点になってしまった。それは個室という空間を獲得することによって初めて開かれた新しい世界であるが，と同時に，そのことによって共存性や世代性を確実に考古の世界に埋葬してしまったのである。

やがて，少年は青年期に達すると，さらに社会に直結




**図―2　居住過程における世代と家空間のギャップ**

したアパートという都市のなかの個室空間へと夢を抱いて移り住んでゆく。この最小限のnLDK空間はこれまでと違い，もはや家族の領域で護(まも)られてはいない。むしろ，ドア1枚を隔て都市と直結しているのである。彼らが住宅の個室で育み，蓄えてアパートに持ち込んだ夢とは，例えば漫画やファミコンやリカちゃん人形の抽象世界のそれであり，ビデオの映像やポスターの写真のアイドルが描き出す具象世界である。そこには，いつも世代が共有するキーワード，友情と努力と勝利があって，最も理想とする対象がいた。

アパートの個室にその夢を持ち込んで，最初に訪れる難題はドアの向こう側で営まれている都市の現実との擦り合わせである。外では，いつも目標や方法や結果が公開に問われていて，個室のなかで育んだ理想や夢と重ならない。このような状況は，やがて青年の心身を自閉させ，自己表現への希求を内向させてアパートのしつらえをますます特化させるのである。青年は，漫画の一コマやポスターの1枚によって，もはやアリスのように直ちに空想世界に入り込むことができる。ポスターを貼り替え，イアホンの音を替えれば，空想世界もまた変幻自在である。そこには人生の目的も，共存への理念も，両親への思慕さえも全く考えなくてすむ不思議な世界がある。しかも，外部世界とのギャップが大きければ大きいほど，素敵な夢をみることができる。

アパートの1室は，こうして現代の都市の住人にとっては，かけがえのないものに成長してゆく。自らの個室を抜きにして，社会とのかかわりをもてなくなった都市人は，もはや1人家族と呼ぶにふさわしい。設備や室数が整わなくとも，このような新しい世代の住要求を受け入れ，自己表現の場を用意していれば，それはもはや歴然たる新しい世代の住宅である。少なくとも，昨今の住宅を現場にして生起する，身のすくむような青少年の犯罪を正面から受け止めるためにも……。

この空想世界をつくり出す住宅は，家族理念の一方の極にあって，これもまた空想することによって生み出される住宅である。19世紀後半，都市化と産業化の叢生するロンドン郊外に居住しつつ，夢にみる最愛の少女，アリスに託して空想世界を描き2冊の書物に著した，ルイス・キャロルの発想拠点はおそらく閉鎖性の強い現代の個室に近いものであったと推測される。そして，今日，急激に増えつつあるアリス・シンドロームと称する一連の自閉的な病もまた，住宅や都市の個室から生み出されているに違いないのである。それは意識が正常であるのに身体的に自己表現ができない生きた屍，「閉じ込め症候群」のアナロジーとして捉えることができる。アリス・シンドロームとは日本の個室が生み落とした，精神の「閉じ込め症候群」であるかもしれない。

## 3．住居・集落にみる計画の手法

住居や集落は，地域に固有な磁場とその土地の風土や文化を反映させている。その形態は集落の歴史のうえに築かれたものである。それは，長い形成の過程で，ときには権力や計画の力が加わって自然の流れに逆らったかもしれないが，概ねそのゆっくりとした変容のプロセスとともに，家や村（町）の意志に沿い不適合な要素を改良しつつ築かれてきたものである。その美しさは，C. アレキサンダーの言うように，不適合要素を改良する長期にわたるメカニズムが生んだものであろう。

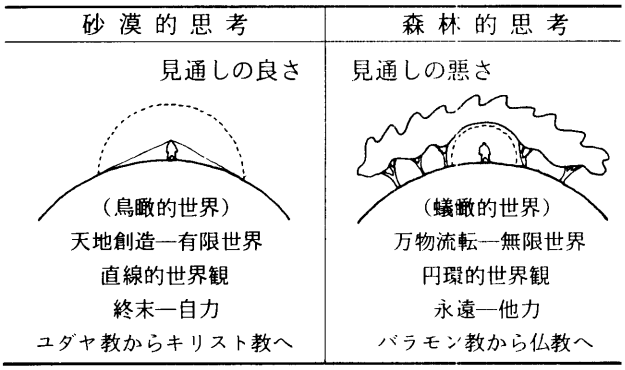
そして，集落はその形成の過程で，自ら共同の施設を生み出し，インフラを整えてきた。当然のことながら，一度形成された施設は，周辺の集落へと移転される。しかし，それも長期の間には，その集落に固有な形態へと変化してきた筈である。このような自然集落では，無意識のなかにもさまざまな規則（習慣）が生み出され，それらが社会の仕組みを築いてきた。そして，その仕組みには，形象化しやすいものとそうでないものがあり，集落のレベルでこれを捉えてみても，その形態のなかに構造が明確に現れる場合と，そうでない場合がある。

日本の集落の場合，一般に地中海地域やヨーロッパなどに較(くら)べて中心が曖昧で，オープンエンドになりやすい。しかも集落の仕組みがなかなか形象化しない性質を備えている。しかしその反面において，わが国の集落は地形や水系との関係，なりわいの空間との関係を強く存続させてきた。ここでは，これまでに調査した幾つかの集落をもとに，住居や集落の仕組みを探ってみたい。それらの仕組みは集落で固有に作用しているものであるが，ここでは立論の趣旨に従って，特徴的な部分を相対化して示すことにする。

### 3－1．構想される一対の構成原理――外庭型と中庭型

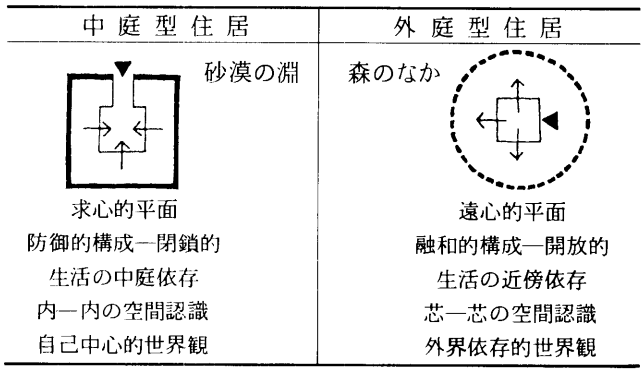
鈴木秀夫は『森林の思考・砂漠の思考』と題する著作のなかで，森林と砂漠を分ける示差的な概念を提起した。対立する諸概念は両世界の思考形式を原理的，象徴的なモデルとして捉えたものである。鈴木はその違いを森林と砂漠のなかに育まれた一神教，仏教とキリスト教のなかにそれぞれ結実しているとみる。そして，鈴木の提出した概念は以下に示す外庭型住居と中庭型住居の前提をなしている。この対立もまた，住居が湿潤地域（森林）や乾燥地域（砂漠）の生態，そこに育まれる思考形式と一体となり構築されてきたものであることを示している。

外庭型住居は見通しの悪い樹林帯のなかで成立した。わが国は，島嶼性を割り引いて考えなければならないが，根こそぎの殺戮を繰り返した乾燥地帯に較べて農業の生産性は高く，融和的で友好的な生活を展開した。外との




鈴木秀夫著『森林の思考・砂漠の思考』NHKブックス、1978より作図

**図—3　砂漠的思考と森林的思考の示差的特徴**




筆者による

**図—4　中庭型住居と外庭型住居の示差的特徴**

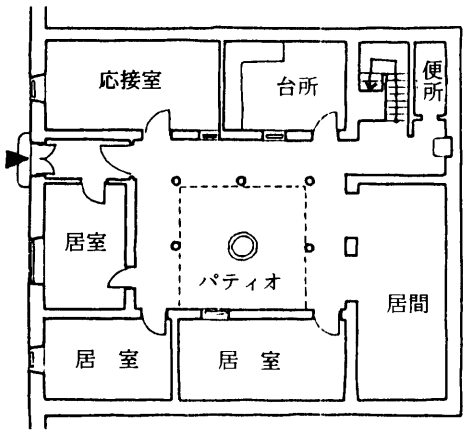
繋がりを断ち炉で暖をとらねばならない季節もあったが，むしろ住居のなかに涼風を通し，蒸暑さを避ける必要が先行した。自然のなかに心身を委ねて居住する住まいは，古くから日本人の心意とともに生き続けてきたが，このような住居の構成は何よりも外界を重んじ開放的な特徴をもつものであった。

この近隣に対する融和的で開放的な構成は，自らの存在を自然の輪廻のなかに委ねることによって，永遠に近づこうとする森林の思考を反映させたものである。森のなかに住む人びとは住居からみえる自然に手を加え，自然の摂理に教えられつつ世界観を築きあげていった。外庭型住居とは，ひとつ屋根の下を間仕切り，部屋それぞれが互いに関係を保ちながら生活を外庭へと向かわせる遠心的構成を原理とし，外庭なる自然との交渉のなかに世界観を築きあげたものにほかならない。

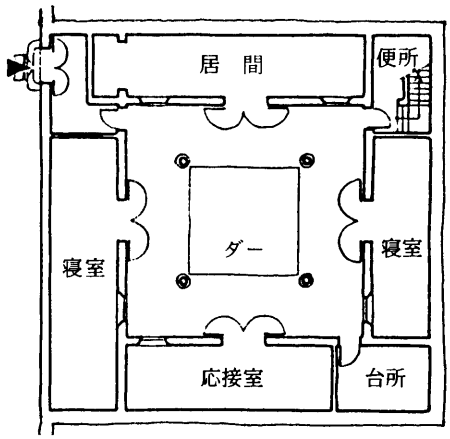
中庭型住居とは見通しのよい砂漠の周辺で発生，展開した住居形式である。生産性の低い有畜農業でかろうじて生計を繋ぎとめてきた地域の居住の歴史をみると，いずれも略奪が繰り返されており，外敵からの防御が主要な居住条件をなしている。しかも防御しなければならなかったのは外敵だけではない。厳しい熱風や砂嵐，昼夜の温度較差や室内気候の乾燥化といった自然条件を克服する必要もあった。乾燥地域の住居とは，まず外部に対して防衛的であり，閉鎖性の強い空間構成を条件とした。

このような構成原理のもとで，人びとは砂漠の思考に忠実に自己の存在証明をかけ，自らの世界を構築する必要があった。この外界に対する閉鎖的な構えは必然的に中庭を核にした求心的な構成を生み出す。その結果，部屋は中庭を介してのみ結ばれ，しかも中庭の贅を尽くしたしつらえや中央の水盤に満々と湛えられた水が，乾燥地域の世界観を見事に象徴することになる。

この対立する形式は空間や領域を認知する方法をも示差的にする。柱を立て，梁を架けて組み立てる外庭型では空間が軸組の芯（しん）をたよりに構築される。この芯—芯の寸法体系は，芯を境に常に空間を2分して捉えるものがあるゆえに，芯の向こう側に必ず連続する空間のあることを認識させ，生活空間に無限の広がりを与え，特有の領域感をもたらすのである。一方，石を積み，土を固め




コルドバのパティオ（筆者実測作成）




フェズのダー
A. Paccard : Traditional Islamical craft in Moroccan Architecture, editions atelier 74, 1980 より

**図—5　中庭型住居の例**

て築きあげる中庭型では，壁の厚みが無視され，空間はあくまでも切り取られた内法の世界として認知される。そして，厚い壁の向こう側は，居住者にとっては関心の及び難い，いわば「外界」として認識される世界である。

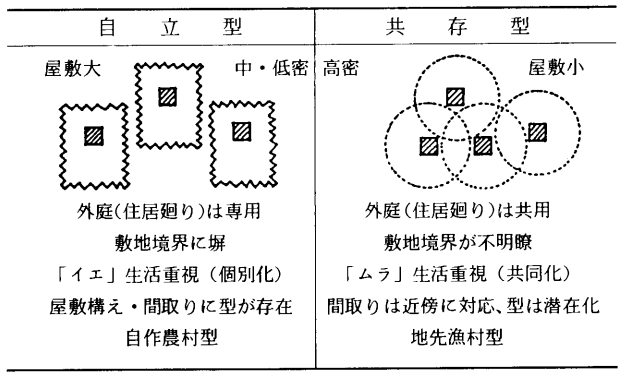
従って，外庭型の住居や集落は開放的な性質を備え，生活も空間も周りへと拡散する。住居や集落のかたちにも形式は見いだし難い。一方，中庭型の住居や集落は周りに対して閉鎖的な構えをとる。図式を描くかのように形式どおりに中心が存在し，生活も空間もこれに向かって求心的に形成される。その具体例はコルドバのパティオやフェズのダーなどに見いだすことができる。そして，この中庭は住居集合やアパートや街区の中庭として，また集落や町の中心に形成される広場として，スケールを変えながら繰り返し出現し，自己中心の世界観を徹底させるのである。

### 3－2．住居集合形態としての共存型

離島漁村での生活とは，島嶼性によって本土社会から隔離され，一方で漁業生態が共同性を強く要求するので，一般に運命共同体的な結束の固いものである。伊勢湾，三河湾に分布する12集落もまた，固い結束を基盤にして成立する。しかし，個々の住居がとりうる集合の形態は多様であり，決して収斂（しゅうれん）しているとは言えない。それらの集落のなかでも，とくに愛知県側の佐久島，日間賀島と三重県側の神島，答志島の住居集合の質の違いは，ともに外庭型の集合でありながら，極めて対比的な特徴を示すのである。

前者を自立型、後者を共存型として双方の特徴を示差的に捉えるならば，自立型とは自作農の居住する農村的屋敷構えの集合を，共存型とは地先の磯や区画漁場を共同管理しながら漁業を営む自主漁民の漁村的屋敷構えの集合をそれぞれ典型としている。自作農の居住する自立型の農家とは，方位や地形とのあいだに一定の屋敷構えの型をもち，さらに南への向きにこだわりながら田の字型などの特定平面に収斂するものであり，類似の住居単位が加算的に集合する性質がある。住居まわりでなされる生活まで屋敷内に抱え込もうとする傾向が強く，その特徴は生垣や塀に表現される。

一方，共存型には屋敷に専用庭さえ確保できないような高密度な集落が多く，外庭は隣接する狭い通路や隣戸と軒を接する隙間の空間に限定される。そこに視覚的な境界の表れる余地はない。そのような空間的な条件のもとでは，居住意識の包絡線が住居まわりに心理的に描かれるだけなので，生活は集落の全域へと広がりやすい。しかも，専用空間に執着する自立型に対して，共存型では生活も室内気候も共用空間に依存せざるを得ない受身の構成をとるのである。そしてさらに，同じ共存型の集落であっても，整型間取りをくずしながら敷地の状況に




**図―6　自立型と共存型における近傍の示差的特徴**

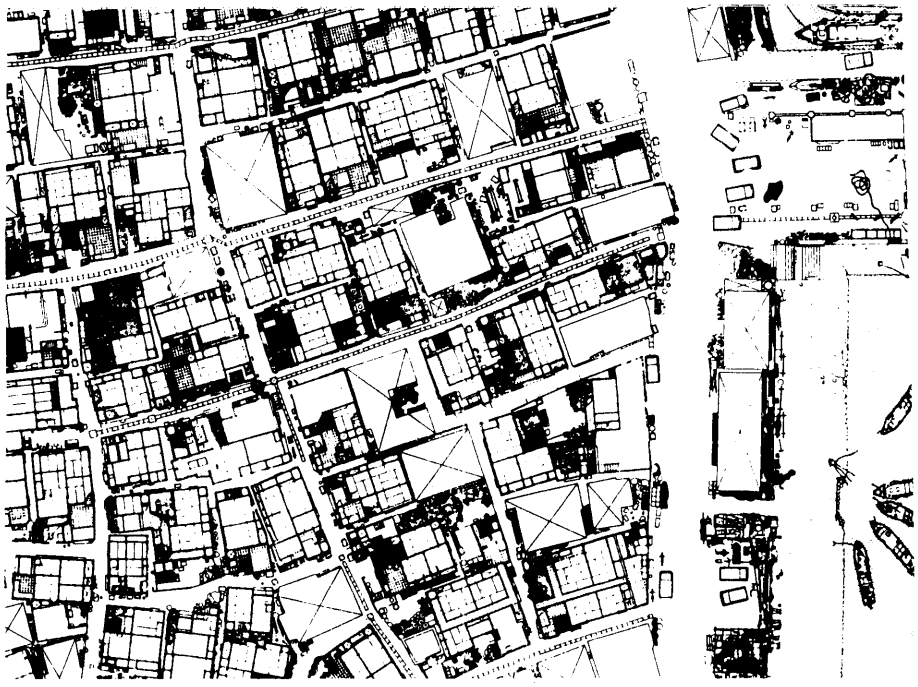
合わせる方法が，集落によって異なってくる。いわば，間取りの変形過程に差異を生ずるのである。それは，以下の背景に支えられている。

間取りを決定する際は，常に隣接する住居との関係が重視される。だから，更新される事例は，それぞれの置かれた固有の隣接条件に対応することによって成立する。住居の更新とは，取り壊される住居が隣接する住居とのあいだに存続させた関係を読みとり，それを新しい住居との関係に置き換え，継承させることである。家や村が理想とする間取りを求めながらも，共存するための制約条件を受け入れて，間取りが変形するのである。家の普請は村の関心事であり，かつては集落の多くの人びとが労働奉仕する「出会い」によって建設されたが，そこには更新につきものの近隣関係や全体の調和を乱す行為を阻止する一種の共同体規制が働いていた。

つまり，出会いの機能とは，①村中が参加することによって，島外から人手を入れることなく安価に更新を果たすことを目的とした，経済性重視の相互扶助的な側面，②更新過程に参加することによって新しい近隣関係や空間構成を受け入れ，あるいはこれに共同体の意志を関与させる社会性重視の側面，③新しい住宅の建設に手を貸し，間取りや意匠を互いに記憶することによって，やがてこの住宅で始められる生活を村中になじみやすくする生活重視の側面などである。

共存型の集合形態は，さらに集落のさまざまな水準に対して複雑なシステムを構築する。答志集落についてみると，その社会組織は以下のような枠組みをもっている。その母体は，血縁組織と年齢階梯集団である。その上に，生活領域に重なる下位上達の地縁組織，そして生業や娯楽などを介して任意に結びつく集団が築かれている。

血縁組織も年齢階梯集団も地縁的なものではない。離島では一般に村内婚を重ねて村を維持してきた歴史があり，村中みな親戚という認識は，答志においても変わるところがない。今日でも，通過儀礼をはじめとするさまざまな行事のなかで，オジ，オバまでを「重親類」として区別しなければならないほど，血縁者は多い。また，



図―7　答志集落（共存型）の住居集落形態

青年時代の寝屋の主人（寝屋親）や寝屋の仲間とは，一生そこで得た「義理」の関係を重視し，共に親や兄弟とみなして苦楽を共にした。さらに答志では，隣の和具部落から嫁をもらう場合，答志が真北に当たるので，答志集落のなかに必ず仮親を立て，そこから嫁入りをする習慣があった。

このような血縁組織や年齢階梯のかたちをとる疑似的血縁組織は，家と家を結びつける極めて強固な関係を築いていた。とりわけ，義理の関係は，閉鎖的な離島の集落が，血縁関係へと一方的に流れるのを食い止め，集落の人間関係を活性化させる役割を担ったものと想像される。いわば，義理の関係とは，集落を存続させる手段のひとつとして血縁に対立する血縁もどきを集落の構造として意図的に生みだしたものなのである。400戸に満たない集落のなかで，それぞれが抱える血縁と疑似血縁関係のネットワークの重層するパターンは，すでに解きほぐせないほどの複雑さをもっている。

地縁集団の母体となるのは，江戸末期の五人組に端を発し，後に十軒組，さらに戦時中の隣組，そして班へと受け継がれてきた十数戸の基礎集団であり，もうひとつは，集落を大きく4分割する「世古」と呼ばれる集団である。双方ともに根強い集団意識に支えられている。なかでも，かつての隣組を継承する班は，外壁の位置を変えることができないほどの過密状態であるにもかかわらず，互いに玄関を向け合って固い集合を形成するのである。これは，葬式などの通過儀礼をはじめとする地縁的互助の絶対的関係を担い，先の親戚などにも匹敵する強い結びつきを備えていることの表現でもある。

答志では，この基礎集団が機能している主要なものとして，町内会，漁協，神社の組，禱屋の組の4つを挙げることができる。そして，それぞれの組の境界に着目すると，なかには道が境界になる部分もあるが，ほとんどが道を介しての背割りの集団である。しかし，集団のそれぞれについてみると，15組，12組，12組，9組に分割されており，その境界は部分的に世古や基礎集団と重なってはいるが，重なっていない場所の方が多い。15組の町内会の基礎集団からみると，他の境界は互いに重なりを避けてやや粗く組織されていると読むことも可能であろう。しかも，これらの集団は，新たな本一分家関係の発生や転出などの動きに柔軟に対応し，変動する傾向にある。

伊勢湾離島の集落には，いまひとつ祭礼時の集団を見逃すことができない。この祭礼時だけに組織される非日常的な集団は，伊勢湾の場合，常に双分集団として出現する。坂手島では江戸中期から戦前まで，「棒練り」と称する巨大な棒倒しが行われていた。坂手は，崖下（がけした）のわずかばかりの平地に細長く形成された集落であるが，祭礼時には日常の集団や組織を廃し，代わりに，中央の神社から海に注ぎこむ小川を境に集落を2分し，川向こうから嫁いだ女性を実家に帰して相手の棒を倒しあったのである。菅島は幾つかの深い谷筋に沿って発達した集落である。ここでは，谷ごとの閉鎖的な日常生活を打開するために，「弓祭り」にはこれらの谷を上と下に2分して祭礼集団を形成した。さらに，答志や桃取の集落では，正月の弓祭りの時だけ，集落形成期の家系を他の新しい家と区別して家々を2分し，神事を行っている。

答志をはじめとする共存型の集落は，社会集団や組織をさまざまな手法で，重ならないように，しかも密実に展開する特徴をもっている。そこには血縁への流れを否定し，むしろ近隣に依拠して住居を開放的に保とうとする意図がある。しかも，そのことが外庭型を存続させているのである。その仕掛けは日常の空間で展開されているだけでなく，儀礼時や祭礼時にまで及んでいる。非日常時には，日常時とは異なる集団や組織の断面が現れ，日常的なケガレを払拭する役割を担うのである。このような，集落をあえて複雑に展開する離島のシステムは，限られた人口，戸数のなかで集落に自律性を確保しつつ，血縁に偏ることなく濃密な人間関係を築くための手法であるということができる。それは集団，組織をできるかぎりラチス構造へと近づけることで目標が果たされるの

である。

### 3－3．間取りを誘導する象限モデル

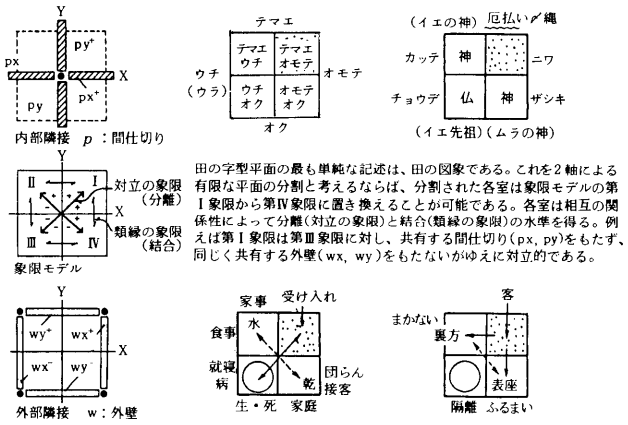
日本の民家空間は，生活の場をオモテとウチ（ウラ），テマエとオクに分割して室分化を達成する傾向があった。その最も典型的な平面が，戦後の近代化が進展する直前まで，全国の農村に広く分布していた田の字型の間取りである。床上の「田の字」部分のみに着目すれば，4つの空間はそれら2組の対立によって構成されるのである。

持田照夫は，この農家田の字型の仕組みを理解する方法として，2方向の間仕切りに注目した。そこでは，オモテ側が南に面する一般例をモデルにして，テマエとオクとの仕切りを「間仕切り南北」，オモテとウチとの仕切りを「間仕切り東西」と呼び，しかもそれらの間仕切りによって分割される4室を，呼称の混乱を避けてA～D空間と定義した。そして，間仕切りに着目することによって，一方で部屋と部屋の関係性を考察し，もう一方で壁としての帯戸などの意味を追究した。そのなかから，A空間の「間仕切り南北」の帯戸に具現する表示空間を見いだしたのである。これは家の社会における位置や関係をしつらえによって表示し，来客にそれとなく伝える装置であり，農家に限らず集落や社会の要素として形成される住宅には欠かせないものであった。

このような2組の対立関係は，平面が田の字型を形成することによって完成する。従って，完成型である田の字型へと収斂してゆく過程のなかに，地域に固有な住居空間の特徴を見いだすことができるかもしれない。一方，矩形の1室住居においても，原理的には2組の対立関係が作用する。その作用は，開放的な外庭型住居に特有のものと言ってよく，以下のようにモデル化して考えることができる。周壁は，開口部と壁とにかかわらず，四方位のそれぞれに内在する方位特性をア・プリオリに受容する。だから，住居平面には，まずその一般的な方位性に対して開口部や壁を選択する水準がある。そして，もう一方で，住居の置かれた立地環境の影響を固有に受けて内部に影響をもたらす水準がある。

従って，1室住居の周壁もまた，それぞれが南面をオモテとして，オモテとウチ，テマエとオクにそれぞれ類似した2組の対立を生む可能性を秘めている。それは，室内の居場所が外に接する4面の影響を受け，決して一様なものとはならないことで理解することができる。そして，1室住居に中柱が発生すると，直ちにその空間は田の字型の図象を暗示させて，間仕切りのない4つのゾーンに分割されるのである。

伊勢湾地域の共存型の集落には，強い田の字（整型）志向がある。アンケートでは，田の字型を1階の理想的な間取りであると応（こた）えるものが8割を超える。平面の類




図－8　象限モデルと伊勢湾離島の田の字型平面

型分布は多様であるが，あくまでも田の字型を中心にして分布する。こうして「田の字」が潜在化するとともに，その意識下には，はっきりと整型の図象が生きているのである。住居は，床面積の絶対的な狭さや高密度な周辺環境の影響を直接に受けて，田の字図象を理想としながらも，間仕切りを欠落させ，あるいは食違えざるを得ないのである。従って，間仕切りの部分に農家田の字型のような固有の形式が現れ，表示空間が形成されるようなことはない。むしろ間仕切りは，用途や季節によって何（い）時（つ）でも取り外すことができるように，等質なものへと変化してきたと言えるのである。この点は，共存型の住居が，持田の指摘した農家田の字型の重厚な構えと本質的に異なるところであろう。

この共存型住居の平面展開の仕組みは，象限モデルに置き換えて考えることができる。共存型の集落では方位規制を受けず，また左右の勝手（カッテと入口との関係）を敷地の状況に合わせて柔軟に展開させるので，住居平面の方を象限モデルに近づけて考えることができる。第Ⅰ象限をニワのある入口，第Ⅱ象限をカッテ（台所）とすれば，第Ⅲ象限のナンド（寝室）と第Ⅳ象限のザシキあるいはオクはおのずと決定する。平面上のX軸は，＋側がオモテ，－側がウチ，一方Y軸は，＋側がテマエ，－側がオクに相当する。従って，例えば第Ⅰ象限での生活は，オモテとテマエの性質が，第Ⅲ象限での生活は，ウチとオクの性質がそれぞれ規定する。ここでは，オモテとウチ，テマエとオクの2組に象徴区分された対立は，それぞれX軸，Y軸の対立する符号に置き換わる。しかも，象限モデルは，符号の一方が異なる類縁の象限（隣の部屋）と双方の符号が異なる対立の象限（対角方向の部屋）を生み出している。だから，オモテにふさわしくない性質の行動は，それゆえに必然的にウラで行うことがふさわしい性質をもつものであり，第Ⅰ象限である入口の行動は，第Ⅲ象限であるナンドでの行動と正反対（対立）の性質を帯びるのである。

共存型住居の生活には，常に4つに分割された平面の全体が想定されている。仮に，条件が厳しく，田の字型平面を形成できなかったとしても，頭に描く基本理念は整型田の字の象限モデルである。欠落化や食違化への間取りの現実的な対応は，整型であっても間仕切りを取り外して柔軟に使用する部屋の使い方と結びついている。はじめから間仕切りが欠落していたとしても，オモテとウチ，テマエとオクの2組の対立は象限モデルのなかで生きており，間仕切りが欠落し拡大した部屋の一方の性質を曖昧にするだけである。

逆に，分割された部屋にどのような室名がつけられていようと，図象はその部屋の性質を規定してしまう。欠落化や食違化は図象の性質を消してしまうのではなく，弱めるのである。だから，住宅で受け入れることがふさわしい生活であれば，それがどのようなものであろうと，それを受け入れる最も適正な場所を，図象に内在する性質が特定するのである。

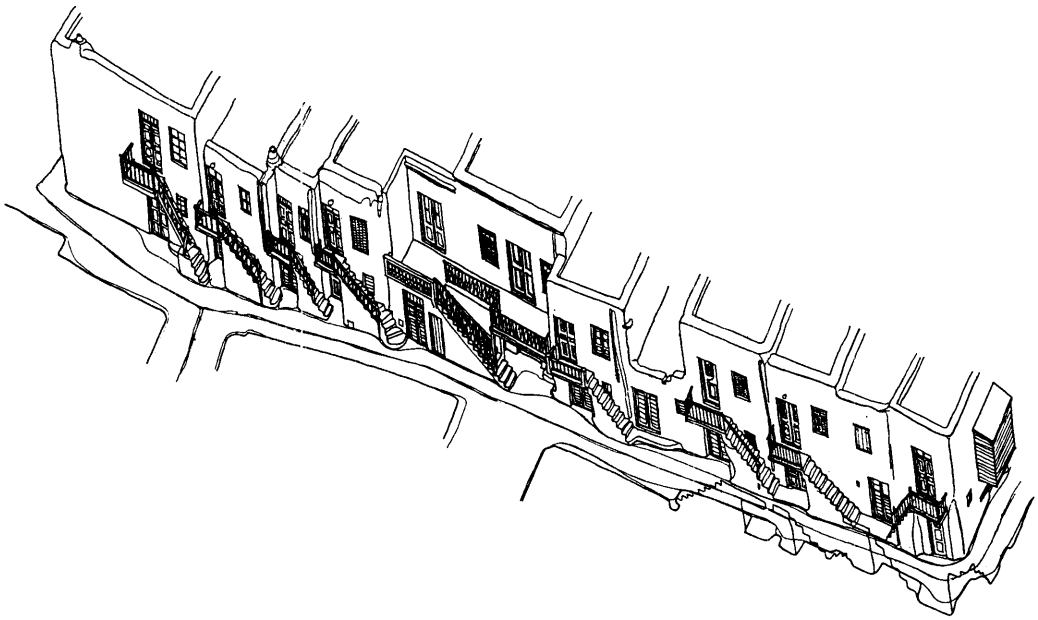
先に述べたように，もともと，共存型とは，集落の結束が極めて強固であるにもかかわらず，それが型となってかたちの上に現れにくい集落である。だから，間仕切りの形態を重視して平面分析を行おうとすると，類型が意味をなさないほど多様な分布を示すのである。それゆえ，その多様な平面のひとつひとつを象限モデルの図象に重ね合わせ，そのモデルとの変位を捉えることによって，それらの背後にある集落の意志が読めてくるのである。

### 3－4．居住様式を誘導する形態

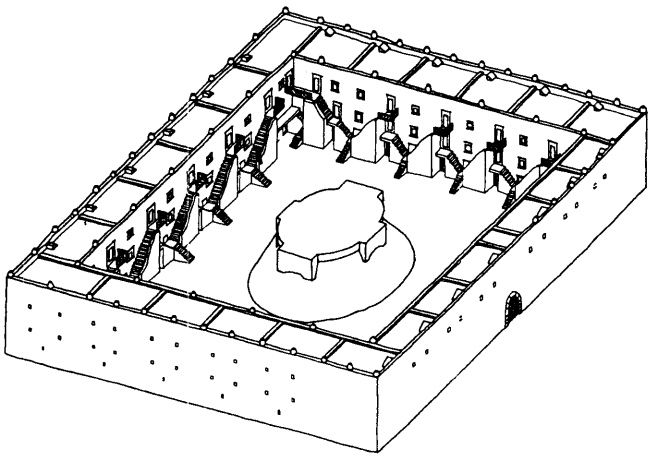
海外の住居・集落には，中庭型住居のように，その構成原理を空間や形態などのものの側に極端に依存させて展開する事例がある。住居や集落での暮らし方，考え方，さらに理念などがあたかも図式を理解するかのように，形態からはっきりと読み取れる場合である。また，特徴ある形態が，そこに居住する人びとに対して，無意識のうちにもある考え方へと誘導する場合がある。例えば，通路にバルコニーを露出する形態が，集落の性質，凝集性を限定するキクラデスの仕組みである。

キクラデス諸島の集落には，個々の住居階段がドロモ（正確にはドロモッシュ）と称する道に露出するタイプのものがある。そこでは，住居の1，2階を接続する唯一の階段がドロモに露出し，一度そこを通過しなければ，上，下階に到達できない仕組みになっている。住居が室内気候のすべてと住居動線の要（かなめ）をドロモに依存する構成とは，住居が共用空間に完全に従属していることを意味する。従って，もはやドロモは単なる道空間ではない。集落全体を日々ひとつのものに感じさせてくれる住様式上のインフラストラクチャーと言ってもよい。つまり，階段は家庭内の生活過程を日常的にドロモへと曝（さら）けだす役割を果たしているのであって，その空間の仕組みが家族の殻を柔らかく保ち，人びとを共存させているのである。

一方，このように無防備で飾らない，生活街路としての意味を強くもつドロモの出所は，街路にではなく中庭にもとめられる。ここは，ローマ時代まではペリスタイルをもつ住宅の分布地域であったし，今でもアテネのプラカ地区などには求心的な中庭をもつ19世紀の住宅がある。集落の道はどこも気まぐれで，常に住居部分との取りあいの結果として生じている。それは決して街路として構造化されたものではなく，いわば，残余の空間に類するものであるが，と同時に生活表現の軌跡として展開



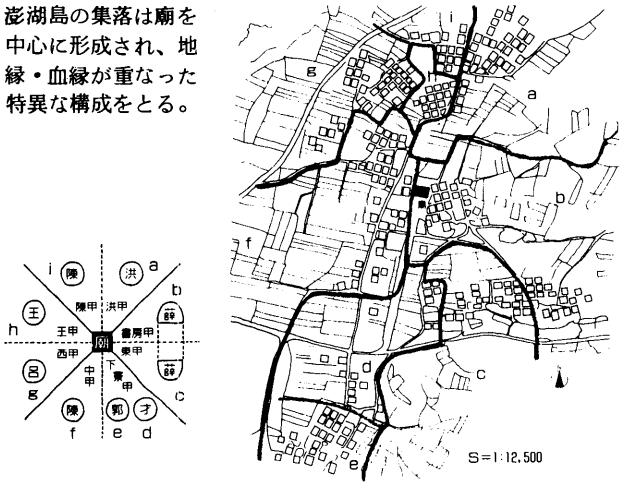
図－9　ミコノスの階段バルコニー



P. PHILIPPIDES: GREEK TRADITIONAL ARCHITECTURE volume 2 AEGEAN: CYCLADES, MELISSA, 1983 より

**図—10　アンティ・パロスの要塞集落**

**澎湖島の集落は廟を中心に形成され、地縁・血縁が重なった特異な構成をとる。**




**図—11　内按村の甲組織と一族のグリッド**

しているのである。

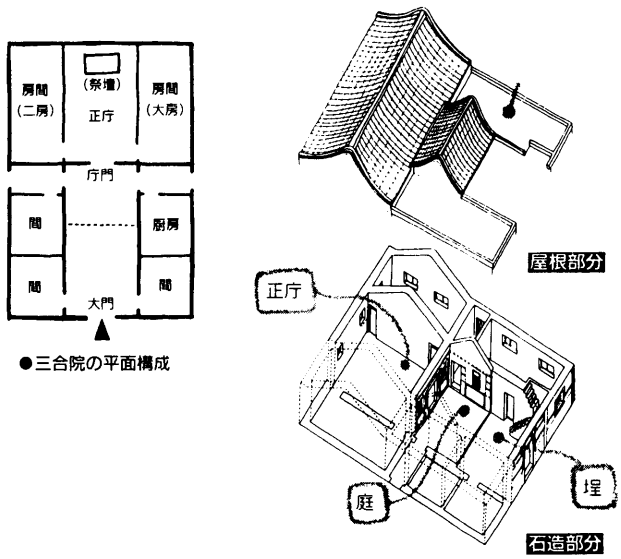
しかも，キクラデスには，中庭によって形成される住居以外の共同体が存在した。ひとつは，アンティ・パロスの要塞(ようさい)である。城壁を兼ね居住部分の内側に形成されるファサードは，ドロモのデザインそのものであった。しかも要塞全体が砲台を中心に据えた中庭型である。ここでは居住部分の住居単位が中庭型住居の部屋に相当し，そのままスケール変換されている。さらに，要塞と類似の構成は，ギリシア正教の修道院にもみられる。要塞との空間構成の違いは，中央の砲台を修道教会に置き換えただけである。しかも，ミコノスのテゥルリアニ修道院では，周囲の僧房のファサードの一部がここでもドロモのデザインそのものによって形成されている。すなわち，階段が付属するドロモの構成は，極めて閉鎖的な共同体の中庭の表現として展開されているのである。

だから，ドロモの構成原理は家族を共同体へと相剋し，住居を集落へと変換させたものと考えることも可能であろう。そこには，個の要求を満たすためにあえて個の原理を超え，もっぱら集落の単位性を強化した経緯がある。つまり，防御の必要性が先行したキクラデスでは，住居動線の要の部分を共用のドロモに曝すことによって，家族単位の結合を弱め，同時に家族を集団へと向かわせ，集落の凝集性を強化したのである。こうして，結束力のある運命共同体を構築した。個々の階段には，そのような住意識を育む力が内在しているのである。

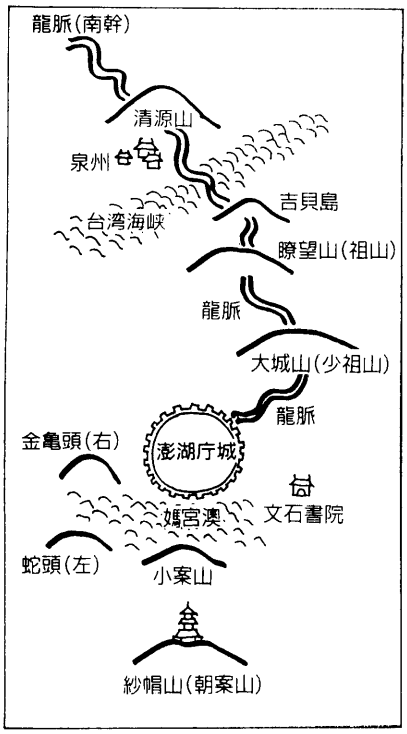
これに対し，漢民族の空間は氏族社会の秩序を幾何形態へと見事に写し換えて展開させている。台湾，澎湖島の内按村は，道教寺院である廟を中心にし，それを運営するための地縁組織，甲を八方位に分けて集落を形成する。しかも内按では，甲をほぼ氏族集団に対応させて同族ごとに住み分けている。

甲を構成する氏族は，いずれも房祖（開祖）が風水思想にもとづき，山を背にして一族の本拠を構えたことに始まる。房祖はその斜面に一族繁栄のグリッドを構想し，子孫にその夢を託すのであるが，内按では，どの甲も房祖の決定したグリッドを忠実に守り抜いて今に伝えている。この一族がセットになってグリッドを使用してゆく住居集合の展開には，福建省に住む漢民族のテクストが反映されている。まず，房祖がふところの深い斜面に三合院住居（大房）を構える。それを長男に譲るが，次の段階でその住居の右に次男の二房を，左に三男の三房を建設する。それ以後は大房，二房，三房のそれぞれの家系が3列構成のままグリッド上に斜面前方に向かって増やしながら同族を形成してゆくのである。従って，甲の住居群の配列は氏族の発展の歴史を視覚的に表現することにもなる。

このような配列の形式は，三合院や四合院住居の空間構成や住み方のなかにも繰り返して表れる。住居の中心部分でひときわ高い屋根をもつ棟は正身と呼ばれ，家の龍脈にたとえられる部分である。ここは床も天井も一段

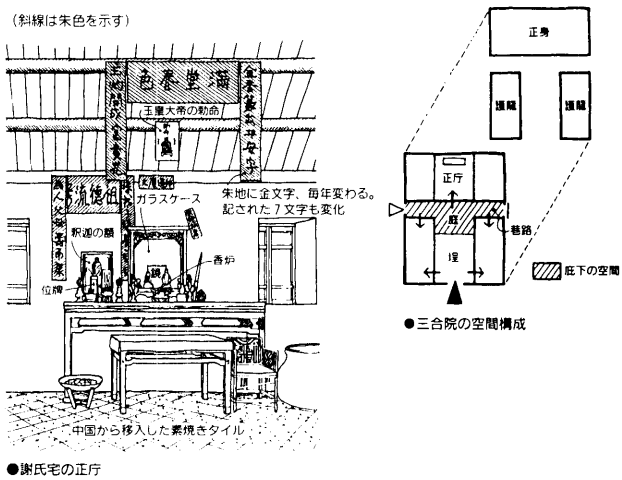



**図—12　三合院の空間構成**




図―13　澎湖島の龍脈概念図

堀込憲二：
風水―宇宙観から
ディテールまで
(建築知識：1990.04)




図―14　正庁祭壇のしつらえ

と高く，その中央の正庁の空間には天空の神々と祖先が祀られる。両脇の房間のうちの右が大房で，ここには家長が居留した。一方，左の二房は家長に準ずる者の生活拠点となったが，同時に子孫をつくりだす象徴的な空間でもあった。そして，両脇から伸びた護龍の間（居室）にも序列が設けられていて，大家族や世代の住み方をルールどおりに誘導したのである。

三合院や四合院では，大門から入って屋根のない堤，そして庇の架かった庭へと進み，さらに庁門を潜り抜けて正庁へといたる中心軸の空間が，重要な意味をもっている。ここは，一族を繋ぎ止め，家族が共に生活するための象徴的な空間であると言ってよい。この位置は，一族のグリッド上では房祖や大房の家系に対応する。これに対して両脇の空間には居室が連続し，右と左，上と下とで序列性を生みだしている。そして，これもまた，二房や三房の家系に対応する。このように澎湖島の住居や集落は，その図式的な配列に，極めて分かりやすい居住テクストを映し出しているのである。

### 3―5．住居や集落に反映されるミクロコスモス

東南アジアは，魅力的なコスモロジーを反映させる住居・集落の宝庫である。とりわけ人類学の分野では，今世紀初めから多くの研究者のフィールドとなり，戦後それらの記録がわが国に紹介されてからは，徐々に建築分野でも研究の気運が高まってきた。近年は，新しい視点や方法を携えて，東南アジアの住居や集落研究を組織的に行うグループも散見されるようになっている。

東南アジアのコスモロジカルな集落の魅力は，空間がそこで行われている生活とセットになって，周りの世界と絶縁状態に近く独自に展開していることである。異文化をもつわれわれの側からみると，ひろばで行われる祭礼や儀礼のみならず，それらのすべてがあたかも舞台の上で演じられる劇のように映るのである。このような別世界の住居や集落を東アジア地域に見いだすことは困難であるが，それに類した世界観を大切にしながら生活を営む地域は存在する。ただし，東アジアの場合は，東南アジアのように周辺と絶縁状態のままに存続する状況を指摘し難いこともあって，そうした観念と空間とのかかわりは，決して直接的な分かりやすいものではない。

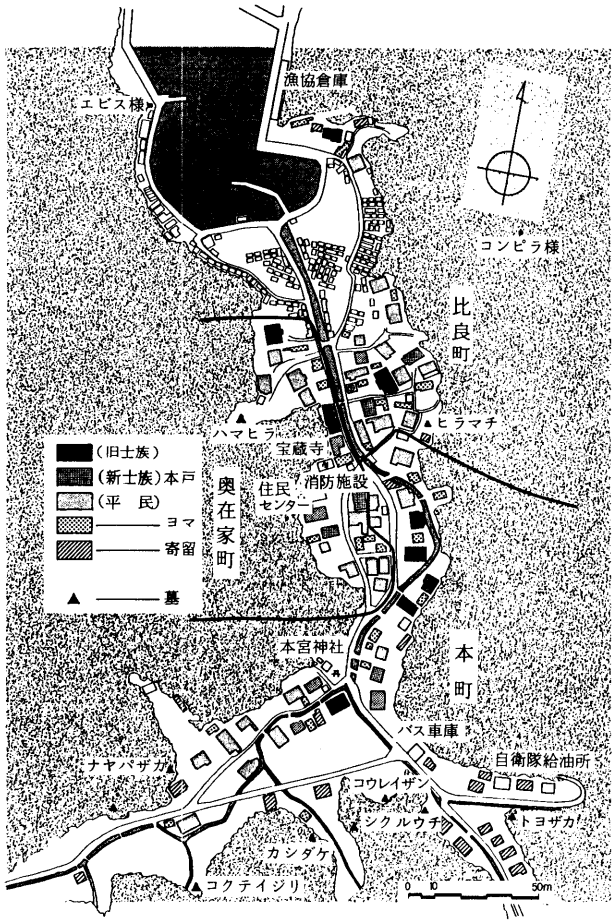
中国人の風水思想は，世界観から自然観，人為の都市観から生活環境やディテールにいたるまでを飲み込んで壮大に展開する。それは中国人に独特なコスモロジーであり，そのなかで彼らは地球環境との独自のかかわり方を展開した。海外へと進出し拠点を生みだすその強さの一端は，風水思想にあったのではないかとも思われる。逆に言えば，風水思想は彼らの価値観の根底に根強く生きて，これからも容易に変化しそうにないのである。

澎湖島の三合院の，大門から正庁の祭壇にいたる中心軸には，背後の龍脈を受け止め，悪霊や死霊を回避しつつ吉祥を呼び込むための風水思想にまつわる工夫が形象化されている。神々と祖先の位牌が祀られる祭壇は正庁の中心であり，そこを起点に霊気が庁門や大門を抜けてまっすぐに外へと突き進む。大屋根の構造がそのまま天井に表れる正庁もまた，風水の強く表れる空間である。勾配天井は龍脈に通ずるので，時間によって峰から丑寅の方角に死霊が下りてくると言われている。庁門の両側には，吉祥を念じて赤地の紙に金色の七文字が記され，窓には吉祥紋様の飾り格子が填め込まれる。そして，凶の方角には正庁へ入ろうとする悪霊などを防止するための魔除けが施される。悪魔や悪疫が入りやすいとされる

場所に大門を設けざるを得ない場合は，大門にも八卦牌などが施され，道が三合院に突き当たる場所には石敢當が置かれる。

台湾では，死者の住まう墓を陰宅と称して，陽宅である三合院などの住宅と区別する。墓を陰宅と称するほど重視し，また住宅と一対で考える風水思想を背景にしているのである。しかも，物差しを区別して陽宅と陰宅を造っていた。文公尺と呼ばれる吉凶の物差しを使用したが，陽宅や神の道具などは門公尺を，陰宅や死者の道具などは丁蘭尺を使用した。澎湖島の場合，陰宅はかつて集落の近くに置かれ，同族ごとに数箇所に分かれるか，共同墓地の形式をとっていた。しかし，近年，陰宅は集落を形成せず，それぞれに風水を考慮して，海に向いた方角の良い一等地へと移動し拡散する傾向にある。なかには，陽宅をしのぐほどの規模のものもある。陰宅の環境はこの別荘化によって，旧集落を離れ難い陽宅よりもはるかに良くなったと言える。こうして澎湖島では，かつて陽宅に生活した祖先たちが陰宅に移っていつまでも共に生き続けるのである。

対馬の集落でも人びとは祖霊を意識し，祖霊とともに生きている。周辺を険しい山で閉ざされた鰐浦は，奥深い入江につながる谷あいの狭い川筋に立地する総戸数74戸の集落である。屋敷は一筋の川（道が並行）に対して




**図―15　対馬・鰐浦の集落構成図**

正面を向けることで，方位に関係なく互いに向かい合う。集落の骨格となる共同空間を川に求めたのである。一方，対馬では，オモテと称する主棟を背後の崖際（がけぎわ）に後退させて前庭を確保し，その両脇に対馬に特有の小屋，ヨマ（隠居家）などの付属屋を並べてそれを囲う構成が，本戸と称して入会権をもつ昔からの家の屋敷構えの基本である。こうして，家々は川筋に道を配置した線状の空間を基軸にして連鎖，形成され，人びとは太い平柱や化粧梁，差鴨居などのヒモキンと呼ばれるダイドコロ（広間）の独特な意匠に思いきり見栄を張って，交流し結束したのである。

お盆にはツギノマに大きな盆棚が設置され，盆飾りが施された。新盆の家では隣室にはみ出すほどの供養の品が飾られた。この盆棚は集落の中心軸である川筋に向かって設置されるので，里帰りした祖霊が互いに向かい合い，交流できる構図になっていた。しかも，以前は川筋に沿ったひろばで盆踊りが行われたので，子孫たちが先祖に踊りを披露しての，生者，死者ともに参加してのお盆を過ごしたのである。こうして，対馬では，先祖まで担ぎだして集落の結束を図り，他者を締め出すのであるが，その価値観は，集落のコスモロジーそのものでもあった。鰐浦における祖霊信仰の強さは，屋敷が狭くてオモテを川筋に向けることのできない家のほとんどが，その向きを先祖の眠る墓に向けていることで推し測ることができる。

奄美，加計呂麻島ではつい最近まで女性たちのあいだにノロと呼ばれる精霊信仰が存続し，神祭が続けられていた。集落周辺の石山やひときわ高い山をカミヤマ，オガミヤマ，オボツカミヤマなどと称して信仰の対象にする村が多く，これを痩せた赤土にかろうじて植生する自然を保護する目的があったと考える住民もいる。かつて，集落の中心には，ミヤーと称するひろばがあり，その脇にノロ（巫女）の神祭りの拝所に使用されるアシアゲ（中柱を含む数本の柱で寄棟の屋根を支えた吹きさらしの高床空間）や神事の行われるトネヤ（ノロやカミに取りつかれた女性たちが籠もる閉じた空間）が建ち並び，デーゴやガジュマルの巨木が繁っていた。それらは，住民たちが集落空間を認知するイメージの中心をなしていた。

奄美の女性は，今日でも巳の日は畑仕事に出ることはない。これもノロ信仰に由来するものであるが，ハブのいる島では巳の日に野良仕事を休むことによって，ハブの恐さやハブを警戒する気持ちを忘れないようにしたのであろう。彼女たちは，こうしてノロの神とともに集落に生きて世界観をつくりあげてきたのである。

奄美の住居は，分棟の形式を存続させてきたが，沖縄の住居に似たコスモロジーを備えている。母屋をウンニャ，炊事棟をトーグラと言い，便所もユージンと称して棟を分けていた。ウンニャとトーグラの間には外廊下

が設けられており，ここは繋ぎの空間としてだけでなく，室内の延長であり，風の通り抜ける快適な場所として夏場の生活拠点となった。吉田禎吾は，加計呂麻島，実久で採集した事例をもとに，奄美の伝統的な分棟型の住宅に対し，次のような特徴を指摘している。ウンニャとトーグラを形式上それぞれ2分割し，女性が床の間や仏壇のあるオモテに南のオモテグチから直接入ることで嫁になることを示し，やがて一生を終えると座棺に入って再びオモテグチから出てゆく象徴的な側面である。その一生の間に，女性はネーショで就寝しながらやがてナンドで子供を産み，炊事仕事にかかわりながら左回りに生活の場面を展開させるのである。これもノロ信仰と不可分な女性の家に生きる姿である。

## おわりに

以上，地域や海外の幾つかの事例をもとに，そのなかから相対把握ができそうな住居や集落の仕組みを提出した。このような集落の営みに身を置き，翻って都市の方を見つめてみると，そこには世代性を欠如させた都市家族の病理がくっきりと写っている。住みながらもほとんど未来に期待していない過疎の集落から，未来に向かって夢をみ続けている都市をみて思うことである。

集落では，ここに報告したような仕組みを今も存続させてきた。それは，集落の歴史が生みだした集落を持続させるメカニズムそのものであり，しかも内在的に生みだしたものである。従って，自然条件やエコサイクルなど，今問題になっている地球環境との好ましい関係を持続させてきた。それは，そこに単にフィジカルな省エネルギーや環境共生のシステムが存在するからではない。むしろ，人びとが共存するために必要な社会関係を築き，それらを住居や集落空間のなかに具現させ，それを繰り返すなかから集落に固有な仕組みを育み存続させてきたからにほかならない。共に住もうとする意志が環境とのつきあい方をも育んだのである。

そのような伝統を存続させる集落はいまや人口比のほんの一握りであるかもしれないが，現代のこの同じ空間に共存しているのであり，そのこと自体が地球環境の大きな課題なのである。集落を存続させているメカニズムは決して古いものではなく，今に生きて機能する新しいものである。だから，もし未来社会を近代の延長上に完璧に描くことができないのであれば，そのことによって，集落は埋葬する直前の「手法」として浮かびあがるのであり，現代に生きるわれわれには，これが廃棄され消滅する前に手法として抽出する義務がある。

近代以降，未来社会は創造する未来にのみあるような錯覚をもち続け，結果として地球環境を破壊し汚染した。しかしながら集落のなかにも，人びとが期待する安定した未来があった。その集落の営みは，地球の未来が，決して創造し構想する未来のなかだけにないことを教えている。集落も環境もすべて古いものと新しいものが共存し，古いもののなかから新しいものが生成されてゆく。だから，その共時態のなかに未来社会が映し出されているのである。

昨今は，環境の問題をエネルギーや資源の問題にすりかえてしまうテクノロジー一辺倒の考え方が支配的である。環境が生きものであり，エコシステムをもって存在していることなどまったく眼中にない。だから，環境の問題には常に釈然としないものが残る。それはおそらく，地球環境をにらんだ人工環境の在り方に言及する論理そのものが，人間サイドの御都合論のようにみえるからであろう。

しかし現実には，どのように考えても，人間は地球環境のシステムのなかでしか生存できないのであり，環境と共生する人工環境もまた環境の論理のなかでしか展開しえないのである。これは，人間が人工環境を造って環境に寄生する動物であることを意味している。人びとは環境に寄生してなじみ，自然の恵みを失敬して暮らしてきたのであって，住居や集落もまた同様に自然の恵みを失敬して環境に暮らす器であった。

そして，緊急の問題はエロスやアリスに耽る現代の都市人が，環境と共生する未来社会を構想しうるや否やである。世代性は概ね自然的，伝統的環境が失われ，近代化する過程で喪失しはじめ，一方エロス性やアリス性は戦後の都市が人工環境化する過程で生みだされた居住観である。それは，オイルショック以降，急激に特化した情報都市の産物であって，世代性を廃棄して生成を遂げたことに問題がある。だから，持続の機能を廃棄し，創造する未来を信じて，激しく消耗しつつ人工環境に埋没する都市人には，もはや地域社会や地球環境のメカニズムが理解できなくなっているのではないだろうか。